

「日中植林・植樹国際連帯事業」2019年度中国大学生訪日団第1陣  
参加者の感想（抜粋）

第1分団（1・2・3号車）

○1. 日本人の防災意識の高さは我々も学ぶべきである。建物の構造にしても玄関に置いてある防災グッズにしても、日本ではどの家庭でも災害に備えている。小学生でさえも地震の明確な知識があり、洪水発生時にどうすべきか、という知識がある。

2. 自分の行動に対して強い責任を持っており、相手の感情をととても気遣う。こうした日本人の意識も、中国は見習うべきである。災害時には“自分の命は自分で守る、条件が揃っていれば他人を助ける”ことや、ゴミの分別処理でも路上を清潔に保つこと、また、公共の場では静かにすることなど、日本人は常に自分の行動が他人に影響を及ぼさないようにしている。

3. 日本ではAEDが普及していることも学ぶべきである。日本では、皆に基本的な救急対応の知識があり、どこにでもAEDが設置されている。しかし中国では、こうした救急対応は周知されておらず、設備もあまりない。

植樹活動と環境防災関連のプログラムを通じて、日本人の環境保護や防災に対する極めて高い自律性と助け合いの精神を体験できた。私自身も環境保護に対する意識が高まった。

帰国後は、日本のさまざまな友好の気持ちや日本から学ぶべき事柄を周囲の人たちに伝えたい。また、今後日本に来る中国人に対して、日本の文化を尊重し、自分を律して静かにし、よりよい中国のイメージを作るよう、アドバイスしたい。

○飛行機の窓から日本の国土を見下ろしたとき、青々とした海原だけでなく、広大な森林に覆われている陸地の様子も目に入った。眼下は緑一色だった。木田幸男先生の講義を聞いて、日本がグリーンインフラを重視していることを知り、生活における細かな部分まで考え、緑化のために最大限の努力をしていることを深く理解した。Think Park Forestを見学して、グリーンインフラが都市の中で極めて大きな役割を果たしていることを実際に体感した。緑地はまるで肺のように都会に新鮮な空気を送り、人間の活動がもたらした汚染とのバランスをとっていた。日本では過去の経験を教訓として十分に活かしている。これは、しながわ防災体験館で感じたことだ。地震による津波や火災に対する対応策を絶えず充実させ、損失を最小限に抑えている。子供のころから皆が防災意識を持つ。このことは中国が十分に学ぶべき点だ。来日前、私は人工呼吸や心肺蘇生などで意識のない人を救助する方法しか知らなかった。AEDのことは初めて知った。日本では公共の場所ならどこにでもあるAEDだが、中国では見たことがない。この小さな機械が、救命時には極めて大きな役割を發揮する。中国も日本に学んで、普及させていけると思う。私の家は松花江の河岸にあり、住民の生活水の水源は松花江だ。私の故郷に微生物を利用した汚水処理施設があるのかどうか知らないが、もしないのであれば、微生物での汚水処理手法を試してみればよいと思う。

○植樹活動を通じて、私もグループのメンバーも皆、日本が環境を重視していることや日本人が大自然を心から愛していることを強く感じた。私たちが自ら植えたあの苗木は、いま、中日両国共同の友好の期待を担ったのである。徳島大学の二人の教授の環境と防災分野の研究は、本当に驚かされるものだった。日本の防災の先進的な技術と意識についても、私は最初のうちはその概念があまりよく分からなかった。しかし、教授の講義を聞いて、内容が簡潔で分かりやすいだけでなく、心に深く刺さるような感覚を覚えた。数名の日本の学生と交流する機会にも恵まれ、学校生活や文化などさまざまなことから、大人や大学生というものの概念が日本と中国では異なるということ、自分の体験で理解することができ、お互いの連絡先も交換できた。最も感動的だったのはホームステイである。おじいちゃんやおばあちゃんとの生活で、日本の都市と田舎とをまさに直接体験することができ、今でも本当に別れがたく、とても感激した。総括すれば、とにかく楽しい気持ちに満ち溢れ、収穫の多い交流だった。今後は、中日の文化の違いについて周囲の人たちに伝え、中日友好交流の発展に努力していきたい。

○日本の緑化はとても優れている。東京を例にとると、北京と同じく国際的な大都市だが、東京では今でも緑化の設計がされた場所が見られ、形がなくても気持ちがさわやかになる新鮮できれいな空気が身近にある。生活の幸福度も上がり、我々も学ぶべきである。

日本語学習者である私は初めて日本に来て、本物の日本人の生活や文化を体験した。これはとても素晴らしい機会である。滞在中の数日間、視察や体験を通じて、多くのものを学び、多くの得難い経験をした。日本人の環境や防災の意識は非常に高い。芝浦水再生センターの視察では、案内者のおじいさんの環境保護意識が強く印象に残っている。元の職場を定年退職した後も、変わらず社会のために行動しようとし、自己実現に努めている。東京湾の水の十分の一は水再生センターで浄化した水だ、と誇り高く語る様子に、本当に敬服した。しながわ防災体験館では、さまざまな救急対応を十分に体験できた。小学生も学ぶ内容も含めて、日本人の防災意識には本当に感嘆させられる。来日した最初の3日間は、日本式のサービスを自ら体験した。初めて日本に来た私たちでも、異国にいるという緊張感がまったくなくなった。同行の通訳やバスのドライバー、ホテルやレストランのスタッフが皆、親切に真摯に私たちをもてなしてくれた。ホームステイでは、最初はホストファミリーと話す勇気がなかったが、うどんやてんぷらの作り方や、うだつの歴史を教えてもらったり、日本の伝統的な方法でご飯やみそ汁を作ったりするうち、お互いの距離が縮まっていった。夕食後は中日の違いについて語り合った。どちらにも学ぶべき点があった。お別れの時には本当に悲しかった。今回の体験は本当に忘れがたく、私たちは交流を通じて理解し、生活の中から学び、文化の伝え手となった。

○1. 植樹活動に参加してとても光栄に感じた。私たちが植えた桜の苗木は、植樹という楽しみを体験させてくれただけでなく、地元の住民にも美しい景色を提供する。日本の防災意識はとても高く、日本では小学生の時から防災意識を養うということを学んだ。このことは、我々もとても学ぶべき点だと思う。

2. 地球の気候は徐々に変化しており、環境はますます劣悪になっている。講義を聞いて、植樹は洪水を抑制できることや、中国の干ばつ地帯への植樹は防砂効果もあることを知った。私にできることは紙の節約、植樹活動への積極的な参加とPRである。

3. 環境防災プログラムに参加して、災害に遭遇した時の自助行動と、他人の生命が危機にあるときの救急対応を学んだ。もちろん、中国にも防災訓練はあるが、救急救命器具は日本のように街中にまで普及していない。中国の防災対策もより完備してほしい。

4. 訪日で最も印象に残ったのは、ホームステイである。来日前は、日本という国は礼儀を重んじ厳格に行動する、という印象であったため、日本人はとても冷淡ではないかと考えていた。しかし実際は、とても温かく私たちをもてなしてくれた。私がお邪魔したホストファミリーはおばあさん一人だった。しかし、おばあさんは私たち6人ももてなしてくれて、本当に感動した。帰国後は、今回の訪日の体験をクラスメイトや友人、家族などに伝えたい。今後、より多くの人々が自分自身で日本の文化を体験し、両国文化の相違点を体験してほしいと思う。

○防災をテーマとした訪日プログラムに参加して、日本国民の防災への努力に心から敬服した。防災意識は日本国民の生活の中にとっても自然に、且つ重要な事柄として確実に根付いている。建築物の設計時点ですでに防災の役割が考慮されている。例えば、小中学校には避難所の役割も果たすプールがあり、公共の場所どこにでもAEDや防災グッズがある。一般市民の避難の意識も感嘆に値する。家具を横置きにすることから食器類の置き方まで、どれもこれも、いつでも発生する可能性がある地震を考えている。防災に対する全国民の努力は、中国が何ともしつかりと学ぶべき点である。

また、日本のサービス業の発展ぶりも強く印象に残った。同行の通訳が話してくれたように、日本は資源が乏しく、第三次産業が日本経済の発展にとって大きな役割を果たしている。滞在中、まさに我が家に帰ったかのような温かいもてなしを体感した。

帰国後は、今回の訪日で体験した阿波踊り、淡路島の温泉、国民の防災、都市の緑化、鳴門のうず潮、藍染といった日本の文化すべてを一つ一つ家族や友人に伝えたい。彼らがこの美しい国に来る機会がありますように。

○しながわ防災体験館の体験プログラムに参加して、日本人は幼い頃から防災避難教育を受け、それが災害時に重要な役割を発揮していると感じた。2011年の東日本大震災では、岩手県の生徒たちが身に危険が迫る中でも秩序を保って避難行動し、危険から逃れたことが、強く印象に残った。また、日本人は毎回の災害から多くの経験と教訓を取り入れている。このことは、防災にとって極め

て重要である。日本では過去に何度も地震が発生しており、それによる火事や津波などの二次災害に見舞われてきた。災害の種類に応じて異なる対策を講じることは、後々の防災に対してとても重要な意義を持つ。徳島大学では、『四川大地震から学ぶ—中日の地震防災対策における友好交流の重要性』という素晴らしい講義を聞いた。その中に、中国も日本も地震発生頻度は大体同じだが、地震災害による死者の数は中国のほうが多い、という内容があった。私自身の経験からみても、中国では子供の頃からいわゆる防災意識や防災に関する知識を教えることがない。これが原因であろう。この点において、日本では小学生の時から系統的で多角的な防災教育を受けることを見習い、中国でも国民の防災意識を高めるべきである。帰国後は、中国の友人たちに防災意識や関連知識の重要性を積極的に伝えていきたい。私たちが生活している北京は、地震は非常に少ないが、生命に関わる災害に見舞われたとき、我々はどのように自助し、共助すべきかを知っておくべきだ。

○徳島県美馬市での講義の内容を、周囲の人々に伝えたい。美馬市の住民である講師から、災害多発地区である美馬市の住民がいかにして洪水を逆に利用し、その状況に依存して生活を続けてきたのかという歴史が語られた。彼らは知恵を使って、絶えず環境に適応し、生活を変化させ、そして、その苦しみの中から自分たちに適した経済活動を模索してきた。また、しながわ防災体験館での体験も伝えたい。日本人が国土で多発する災害経験を経て“自助・共助・公助”の方式を生み出し、災害から上手に逃れ、災害がもたらす影響を最小限に抑えていることを私自身も体験し、非常に驚きました。自分でも消火体験や救急救命の具体的な方法などを学び、非常に勉強になった。美馬市の植樹プログラムでは、日本の友人とともに美馬市に中日友好の代表となる 15 本の桜の苗木を植樹した。両国国民の友好の証であると同時に、世界にまた一つ生命力のある緑を添えたことになる。最も伝えたいことは、ホームステイである。日本人に対する認識が大きく変化した。ホストファミリーは温かく、明るく、純真な心と愛情があり、私たちと友人になることを望んでくれ、両国の関係が良くなることを信じている。ともに進歩し、協力し、ともに幸せになろう！

○最も印象深かったのは、日本の環境保護と資源のリサイクルである。ゴミの分別は日本では広く普及しており、雨水の利用や汚水処理も世界の模範といえる。環境保護の意識が人々の心に深く根付いており、この点は中国とは大きな開きがある。また防災面では、日本は防災教育が非常に整っており、小学生全員が各種災害にいかに対応するかという教育を受けている。日本の建築物の特殊な耐震構造も学ぶべきである。日本の田舎の発展ぶりも強く印象に残った。日本は田舎でも先進的なインフラが整っていて、田舎の“トイレ”はまさにその“縮図”である。日本の田舎のトイレは非常に衛生的で近代的である。美しい田舎の風景と快適なインフラが極めて大きな魅力を持つ郷土文化を作り上げている。中国は都市と農村の不均衡という問題に直面している。私は、この問題の解決に、日本の経験が貴重な参考となるのではないかと思う。

○私たちは中央大学と徳島大学を訪問した。日本の高等教育のシステムが強く印象に残った。ほとんどすべての大学が、数十年の発展と変遷を経ていくつかの圧倒的に強い学科を有しており、日本国内ひいては世界においても揺るぎない地位を保っている。日本の高等教育の重点的な発展や協調推進といった政策は、高等教育のバランスを効果的に維持しており、学生に良好な交流発展のプラットフォームを提供している。中日両国が協力を強化し、交流を促進し、中日関係の良好な発展の趨勢を維持していくことを期待する。

## 第2分団（4・5号車）

○日本に来て最も驚いたのは、緑化と環境、そして科学技術である。日本の森林率は70%にも達している。山間部の樹木の密度も高く、多くの生態系の息遣いが残されている。それにもかかわらず、さらに絶えず植林植樹を続け、木材は多くを輸入に頼り、自国の資源を大切にしている。環境は美しく、街中の道路にもゴミ箱がほとんどなく、そしてゴミもない。日本人は袋を持参しゴミを持ち帰り、分別処理することに慣れており、これは国民の習慣となっている。すべての人が環境保護を重視している。中国の多くの山地でも植樹は行われているが、とてもまばらで、ゴミも分別されていない。おそらく、日本ようになるにはまだしばらくの時間が必要だろう。しかし、努力は続ける。今後は、自分も緑化造林事業に参加し、緑化のためになにかしらの貢献をしたい。

日本人はとても礼儀を重んじ、厳格といえるほどだ。メイドインジャパン製品はとても精緻で、

パーフェクトを追求する。日本人は学ぶことが好きで、物事にまじめに厳格に取り組むが、文化の中での独創性が少ないと感じる。多くのものが、他国の文化から取り入れ、融合させたものだ。中国文化の多元性は歴史の凝集であり、魅力に富んでいる。とはいえ、日本の科学技術の発達は目を見張るほどで、多くの技術が、中国とは比較にならないものだ。ゴミの回収利用では、中国は遥かに及ばず、学ぶべきものである。職人の精神も一考に値する。

中日両国が今後も交流を続け、小異を残して大同を求め、互いに理解し、互いに受け入れ、友好的に付き合い、互いに学び、長所を生かして短所を補い、ともに進歩することを望む。

○日本のエコシティの建設や全国民の自然保護意識に本当に驚いた。田舎に暮らす一般市民でさえ、環境保護の意識はとても高く、これは中国と大きく異なる点である。日本の環境への投資と保護の状況を見て、私も環境保護事業をますます愛するようになった。美しい中国を実現するための力になりたい、これは私の夢でもある。日本の環境保護教育、特に細かなゴミの分別は小学4年から始まる教科であり、これもまた全国民の環境保護意識の重要な要因の一つだろう。“急がばまわれ”。私は中国の現状を考えると、解決を得るための最も良い方法は何だろう？私は一体何ができるのか？とよく考える。ここでその答えが見つかった。それは、学校教育、親の影響であり、それが一人一人の子供の環境保護意識に大きな影響を与えていくのだと思う。我々の世代は環境保護教育を前進させていく重要な世代であり、私の目標もいっそう明確になった。

○訪日プログラムに参加して、とても多くのことを学んだ。最も印象深かったのは、金沢市西部環境エネルギーセンターの見学である。ここはゴミ焼却処理施設であるが、とても先進的な技術システムが運用されており、細かな処理の方法がとても素晴らしい。本当の意味でのグリーンサイクル・ゼロエミッション・汚染ゼロを実現している。とくに、ゴミの焼却時の空気の送り込みでは、このセンターでは廃棄物から生じる臭気を利用している。これが、ゴミのスムーズな燃焼に役立つだけでなく、ゴミの臭気が周辺環境に与える汚染問題も解決している。当然ながら、処理をする前段階で日本では極めて細かなゴミの分別が行われている。そしてこの点は、中国ではまったくきちんと根付いていない。私自身の経験からしても、ゴミを捨てるときにきちんと分別して適切な回収箱に入れているのに、回収車がそれを回収するとき、作業員は構わずに全部まとめて車に押し込んでしまう。これではゴミ分別計画は全く十分に実現できない。こうした一つ一つの点を、中国はまだまだ強化する必要があると思う。実際、中国と日本にはまだ多くの差がある。中国の国情に合わせて、中国に適した処理技術を開発製造し、相応の政策体系も整えていくことができると思う。再び日本に来て交流し学べるチャンスがあることを望んでいる。そして次回は、環境保護に関する考え方がよりたくさん学べる場所を訪問したい。今回はたくさん先進的な設備や前衛的な技術を知った。次回はより多くの理論や研究内容を学びたい。帰国後は、日本での見聞や感想を周囲の人、クラスメイトや友人に伝え、彼らと一緒に学びたい。再び日本を訪問する機会があることを確信している。また会える日を楽しみにしている。

○1. 日本科学未来館では、ジオスコープで気候や生物多様性の過去・現在・未来の変化を見た。館内ではたくさんの日本の小学生が見学していた。中国も小学生に対して意識を高める教育をし、幼い時から環境保護や防災の概念を養うべきだと感じた。

2. 植樹活動では、中国にも植樹祭があり市民の植林植樹の意識はますます高まっており、実際の行動も始まっている。この点では、両国はどちらもとても良くやっている。

3. 交流に関しては、私たちはお互いに英語学習に力をおき重視すべきだと感じた。言葉が通じないことは、双方の意見交換や相互の学習にとっても影響する。しかし、それでも日本の数多くの研究成果を学ぶことができ、今後の学習にとっても役立つと思う。

4. 和風旅館やホームステイで、日本のトイレが手洗いを水洗水として循環利用しているのを見た。水道管から出た水で手を洗った後、その水が水洗タンクに流れ込んでいく方式はとても節水効果があり、提唱するべきだと思う。

全体として、日本には私たちが参考にし、学ぶべき点が数多くある。中日の交流をより強化して中日の関係がさらに一歩進むことを望んでいる。

○学ぶべき点：日本の都市におけるグリーンインフラはとても素晴らしい。緑化と同時に、排水の

役割を兼ねていることは学ぶに値する。日本は伝統文化の維持とその発信が非常に優れている。例えば、私たちは輪島キリコ会館や兼六園などを参観したが、これらは国による伝統文化の保護であり、文化の継承である。強く印象に残った。

伝えたい情報：まず、日本という国全体から受けた感想は、日本人の親切さである。ホームステイではおじいさんとおばあさんがとても温かく接してくれたし、通行人に道を尋ねた時も親切に案内してくれた。ショッピングの時も、販売員がとても丁寧で、大学での交流では日本の先生や学生の笑顔に感動した。次に、日本は公共衛生がとても素晴らしい。空港、道路、公共トイレ、どこもとても清潔で、きちりと管理されていた。

最後に、日中友好会館が提供してくれた訪日の機会に心から感謝する。自分自身で日本を体感することができ、今回の旅程は心に刻まれ、永遠に忘れられない。

○植樹活動：現地の住民と一緒に植樹をし、日本人の友好と情熱を感じた。環境防災分野：北区防災センター視察で日本の一般市民の防災対策が非常に整っていることを知った。災害発生後の行動も非常に秩序があり、こうした点が非常に勉強になった。

日本滞在の数日間、プログラムは内容が豊かで充実していた。初日の講義で、グリーンインフラについて学び、知識を得た。私の専攻している分野と非常にリンクしており、将来の中国の都市建設にとって、とても参考になる。都会の中の古跡である浅草寺では、地元の文化を体験した。工学院大学の訪問では、日本の学校教育の方法を知り、実験室の見学では非常に多くの感想を持つことができた。学生たちは皆自分の実験室で研究や討論をしていたが、中国では教室で授業を聞く形態がほとんどだ。日本の学生はより自由であり、より実践的な学習ができる。これは私たちも参考にすべきだ。金沢では、キリコ灯籠という地元の文化風習を知った。私たちも体験することができ、皆で力を合わせて担いだ時は、とても感動した。

○中国には“少年が優れていれば国も優れる”という言葉がある。青少年は国の未来であり希望である。日本が青少年への教育を重視している点は、我々も大いに学ぶべきである。北区防災センターではさまざまな震度の地震を体験し、火災の煙が充満した部屋からの避難体験をし、消火器の使い方を体験した。また、金沢市西部環境エネルギーセンターではゴミがピットに入れられ、堆積発酵され、焼却され、焼却灰を処理するまでの全工程を実際に目で見た。こうした処理施設の傍らにも、アニメ風のイラストのポスターやゲームマシンが設置してあることに、私は非常に驚いた。厳粛にかつ活発に、真剣にかつ軽快に、こうした楽しみながら学習する方法で、子供たちに幼い時から理解させ、自ら体験させることで、現実の災害や試練に直面した時に、慌てず冷静に問題に対処する能力が身についていく。気持ちのこもらない定型通りの訓練では決してなく、実体験として経験するのだ。このほか、日本人の職業意識の高さにも非常に敬服した。訪問地の先々で、エネルギーセンター、防災センター、植樹活動でも、目にしたスタッフは多くが年配の先輩方といえるが、彼らは皆矍鑠として若々しく、健康状態もよく、我々の発する一連の問題やさまざまな専門分野に及ぶ質問にも整然と一つ一つに回答してくれる。自らが担当する業務への理解度や職業意識の高さに、私は非常に感動した。“老いてなお生き生きと、老いてなお学ぶ”を実現していて、身体は徐々に衰えていても、それをものともしていない。彼らの若々しい精神を見て、自分や家族たちも、こうした楽観的で若々しい精神をこれからも維持していきたいと思った。